

# 第 29 回看護の日事業

## 看護職員等からの体験談

当協会は、平成 20 年度（第 18 回）から「看護の日」にちなんで、「新人看護師からの体験談」を募集し、優秀作品を表彰してきました。平成 26 年度（第 24 回）からは、看護師養成機関からも募集するようになり、今年度は 146 件の応募がありました。どの作品にも、患者さんとの関わりを通して学び、看護への思いを深め、さらに気持ちを新たに看護に取り組んでいこうとする思いがあふれていました。

応募して頂いた方々をはじめ、各施設の皆様に心より感謝申し上げます。  
その中から、受賞者 6 名の作品をここに紹介します。

### 受 賞 者

☆ 最優秀賞 1 名

金子 真観 (厚生連高岡病院)

☆ 優秀賞 2 名

川上 玲奈 (富山県立総合衛生学院)

宮田 裕紀菜 (富山県リハビリテーション病院・こども支援センター)

☆ 特別賞 3 名

大槻 遥 (富山赤十字病院)

野尻 麻友 (富山県新川厚生センター魚津支所)

山崎 明日香 (富山県立中央病院)

☆ 参加賞 140 名

公益社団法人 富山県看護協会

# 最優秀賞

## 最愛の人の最期

厚生連高岡病院 かねこ 金子 まなみ 真観

「今後どうするか、お考えください。」

脳幹出血で入院したA氏の奥さんに主治医が伝えた。「主人は延命治療を望んではいなかったのですが、何もせずに看取りたい気持ちもあります」。奥さんは涙ぐみながら話した。新人看護師として脳神経外科に勤め、約半年。初めての光景にドラマのワンシーンを見ているようだった。

病状説明が終わり病室へ戻った時、奥さんはじっとA氏を見つめていた。どのような思いでA氏を見つめているのか、考えるだけでも息が詰まる思いだった。看護師としてどう言葉をかければよいか考えたが、ありきたりな言葉しか出てこなかった。そんな私に奥さんは「主人は元気だった時、笑いながら『俺は延命治療はいらんぞ』と言っていました。知識がないので、どこまでが延命治療になるか分からなかったけれど、まさか自分がこんな選択をするなんて。意識がなくても私としては生きていてほしい」と目頭を押さえながら、心のうちを話した。その日は「主人がどうしたいのか、落ち着いて考えることができましたが、もう少し時間をください」と帰宅した。

次の日から私たちは、奥さんが現状と向き合った選択が出来るよう、日々変わる思いを傾聴し、求められれば情報提供を行ったりした。

病状説明から5日後、何もせずに看取る方針となった。苦渋の決断であったにも関わらず、奥さんは真っすぐな目をしていて。その後は、悔いなく2人の時間が送れるよう、「自分たちが奥さんの立場だったら」と看護師間でカンファレンスを行った。奥さんの希望があれば一緒にケアを行うこともあり、夫とともに過ごす日々笑顔も増えていった。

そんな日も長く続かず、徐々に状態は悪化し、A氏は静かに息をひきとった。奥さんは泣いていたが、穏やかに「おつかれさま」と夫を抱きしめた。そして私たちに「たくさん悩みましたが、この選択で主人も私も悔いはありません。ありがとうございました」と深々とお辞儀をした。

これが初めての看取りだった。看護技術を身につけることばかりに必死だった新人の私は、看護の基盤は患者だけでなく、その家族を含めて「相手を想う気持ち」が前提であることに、あらためて気付かされた。奥さんの「ありがとう」の言葉が看護師としての私を成長させてくれた。

# 優 秀 賞

## 温かい手と心

富山県立総合衛生学院 かわかみ れいな 川上 玲奈

私が小学生の時のことである。「今すぐ家に帰られ。お母さんから電話があった」と学校の先生から知らされた。

前日に母から告げられていたのである。「パパ、今、入院しとるん。いっぱい器械ついとるから、びっくりするかもしれんけど、あした一緒に(病院に)行ってくる?」とお見舞いに行こうとしていた矢先のことであった。私は全力で走って家に帰り、母の迎えを待った。病院に到着して病室に入ると、父は人工呼吸器につながれていた。42度もの発熱のため、身体がとても熱かった。「ねえ、パパ起きて」と何度、声をかけても、叩いても、目を閉じたまま微動だにしなかった。当時、小学生だった私でも大変な状態であることは理解できた。

急なことであった。その日の夜、父は息を引き取った。周りの大人は手続きか何かで病室からいなくなり、病室には私と亡くなった父、看護師さんだけが残った。私は涙が止まらなかった。父の死を受け止めきれなかったのである。そんな時、そばにいてくれたのが看護師さんだった。その看護師さんは、私に何も言わなかった。ただただ、私が落ち着くまで背中を優しくさすってくれたのである。その手と心はとても温かかった。その時の私には何の言葉もいらなかった。誰かに寄り添ってほしかったのである。

それから私は、その看護師さんのように人の心と身体を癒すことができる看護師を目指している。

看護学生になり、夏季休暇中に看護学生アルバイトに参加した。するとそこには、私が看護師を目指すきっかけをくれた憧れの看護師さんの姿があったのである。私は感動した。短い期間であったが、憧れの看護師さんと再会することができて本当にうれしかった。それと同時に、あらためて人の「心」を看ることができる看護師になりたいと思った。

## 優 秀 賞

### いつもは笑ってくれるのに

富山県リハビリテーション病院・こども支援センター みやた ゆきな 宮田 裕紀葉

その男性患者さんは口数も少なく、いつも車椅子に乗って病棟をぐるぐると回ったり、食堂でじっと外を見て過ごす方でした。もともとは脳梗塞を発症し片方が麻痺となり、リハビリを目的として入院していた方です。病院での生活にも慣れてきたころ、廊下ですれ違う時は私の顔を見て、にこっと笑い、アイコンタクトをとってくださるようになりました。そして私も同じように、にこっと笑って答えるのが日課になっていました。

ある日、その患者さんはいつものように車椅子で廊下を進んでいました。私はいつものように患者さんの顔を見ましたが、患者さんは笑いませんでした。あれっ、と思いました。私は自分の仕事もあり、声をかけずに通り過ぎました。その時の険しい顔をしていた患者さんを今でもはっきりと覚えています。その後、食堂にいる患者さんを見かけた時、やっぱり様子を変だと思ひ声をかけると、「胸がおかしい」と苦しさを訴えられました。胸部症状があったことから、心電図を測定することになりました。測定の結果は心臓に梗塞が見られるというものでした。その結果に驚いていると、患者さんはベッドで発作を起こし、心肺停止となりました。それからは、心臓マッサージを始めとして懸命な蘇生が行われました。心臓マッサージも、AEDを使用することも初めて目にする光景でした。戸惑いながらも、自分ができることを探し、蘇生に参加しました。その結果、患者さんは一命を取り留めました。私はとても安心したのと同時に、微力ながらも命を救うことができたことに達成感を感じました。

後日、患者さんの奥さんは「あんまりしゃべらない人で、よく苦しいって言ってくれた。気付いてくれてありがとう」と涙を浮かべて話されました。あの時、声をかけなければ亡くなっていたかもしれない。そう思うといつも行っていたコミュニケーションがとても大切なことだったのだと感じました。そして、自分が人の命を預かる仕事をしていることを初めて実感しました。まだ一年目の私にとって衝撃の一日で、忘れられない経験です。

## 特別賞

### 今も生きている祖父の言葉

富山赤十字病院 おおつき 大槻 はるか 遥

私の両親は共働きだったため、幼いころは祖父と祖母が面倒を見てくれた。小さい時から優しい祖父母が大好きだった。私が看護師になった年の春に祖父が胃がんでであると聞いた。見つかったときには、すでに手術ができず、抗がん剤治療を受けていたと知った。私が通う看護学校に隣接する病院で抗がん剤治療を受けており、その廊下から私の姿が見えないかと看護学校を眺めていたようだ。また、主治医の先生には国家試験が終わるまでは病気のことや治療をしていることは、私に話さず黙っていてほしいと話していたことを後で知った。

しばらく外来通院で抗がん剤治療を行っていたが、その年の夏に緊急入院した。山登りが趣味だった祖父の体は、筋肉質でがっしりとした体格だったことがうそのようにやせ細っていた。入院中に「家に帰りたい」と言っていたが、祖母と2人暮らしであり、祖父が急に倒れてしまうことを懸念し、その怖さから家には連れて帰れないという思いがあった。担当の看護師さんはとても親身な方で、忙しい業務の中でもその思いをくみとり外泊を提案してくれた。その提案の翌日、外泊することになったが、家族はみんな最期の外泊になると分かっていた。その夜は私も祖父の家に泊まり、子供の時にそうしていたように川の字になって祖父の横で寝た。痛みがあって、たくさんは話せなかったが、私が生まれたときの話や子供の時の話をしてくれた。そして、「いつも相手の立場に立って考えること、自分が相手だったらどうしてほしいかを考えて、それをしているうちに、自然と周りが応援してくれる。自分のことを考えてくれる看護師か、そうでない人かってことくらいすぐに分かる」と言われた。その外泊の数日後に祖父は亡くなった。

看護師4年目となった今、縁があって緩和治療病棟で働いている。つらそうな患者さんの姿を見ると、時々逃げ出したくなる時があるが、そんな時は祖父の言葉を思い出す。相手の立場に立って考えること、それは当たり前のことかもしれないが、自分に「逃げてはいけない」と祖父が言ってくれているように思うのだ。

終末期の患者さんと関わる中で、祖父のことをよく思い出す。祖父とはもう会えなくなってしまったが、祖父の言葉は今でも私の中で生き続けている。

## 特別賞

### 地域で暮らす精神障がい者を支えたい

富山県新川厚生センター魚津支所 のじり 野尻 まゆ 麻友

私は、病気や障がいを抱えながら地域で暮らす人が、困った時に頼れる身近な保健師でありたいと思う。

厚生センター保健師1年目にAさんと出会った。Aさんは、現実にはないものが見えたり聞こえたりする統合失調症の男性である。ある時から治療を中断し、近隣住民とトラブルとなったため、「早めに受診してもらうのが良いのでは」と厚生センターに相談があった。「絶対、病院なんか行かんからな」と断固として拒否するAさんに対し、私は「今、治療を受けたほうがいいですよ」と何度も丁寧に伝えた。Aさんは渋々了解し、一緒に精神科病院に行き、入院することになった。

3か月の治療を受けて病状は安定し、退院することになった。退院にあたり、Aさんの希望は自宅で生活しながら働くことであった。

過去に働いた会社では、自分の気持ちをうまく言葉で表現できず、周囲との人間関係で苦い経験をしていた。退院前にAさん、家族、主治医、看護師、保健師などが集まり今後の生活を話し合う場で、Aさんは「働きたい。でも、自分にできるか不安だ」と素直な気持ちを話してくれた。

そのため、仕事を体験しながら自信をつけていけるよう、退院後、社会復帰を図る就業支援事業所に通い始めた。事業所のスタッフや、そこに通う仲間のサポートも得ながら、部品の組立、加工など、少しずつできることが増え、今では正確さが必要とされる緻密な作業も任されていると聞いている。

事業所以外にAさんは、週1回、社会復帰や自立を支援する地域活動支援センターの軽スポーツに参加し、仲間との交流を楽しんでいる。私は保健師として、家庭訪問のほか、時には軽スポーツと一緒に参加し、日々の暮らしぶりや服薬が継続できているかを確認し、症状とのつきあい方を一緒に考えている。

最近、「特に相談することもないけど、近くを通ったから来たよ」と受診の帰りに厚生センターに立ち寄り、穏やかな笑顔で近況報告をしてくれるようになった。

Aさんへの支援を通して、地域で暮らす精神障がい者が治療を継続し、仕事や社会参加の機会を持ちながら、住み慣れた地域で安心して暮らせるように、今後も地域の身近な相談者としての役割を果たしていきたいと思った。

## 特別賞

# 助産師の持つ魔法の手

富山県立中央病院 やまざき 山崎 あすか 明日香

助産学生るとき、妊娠初期から出産後まで継続して関わる継続事例をはじめて受け持った。妊婦さんに対しては、妊婦健診のたびにコミュニケーションをとり、その時の生活の状況や思いなどをうまく引き出し、それに応じた保健指導を実施していくことが求められる。しかし、あがり症だった私は事前に用意した質問や話を準備した通りに実施することで精一杯で、その時の妊婦さんの気持ちをうまく引き出したり、それに合わせて伝え方を修正したりすることが全くできなかった。また、私自身の緊張や焦りは妊婦さんに伝染し、互いに緊張した中で、うまくコミュニケーションが図れず、毎回、会話はどこかぎこちなく、良い関係性が築けないまま妊娠期が過ぎてしまった。

迎えた出産当日、順調にお産が進む中で次々にくる痛みで涙を流しながら「もう嫌だ、助けてほしい」と必死に訴える産婦さん。私は未熟な自分に何が出来るかを必死に考え、できる限りそばに寄り添い、手を握り、声をかけ、腰をさすった。体に触れるたびに、それまで痛みで全身を硬直させていた産婦さんの体の力がふわっと緩み、表情が和らぐのを感じた。

無事、元気な男の子を出産した後、私は産婦さんから「助産師さんの手ってすごいですね。痛くて心が折れそうな時に、触れてもらうだけで安心できて、魔法みたいに痛みが和らぎました。ずっと付いていてくれて本当にありがとう」と声を掛けられた。産婦さんに対して妊娠中から常に自分の未熟さを感じていた私にとって、その言葉は涙が出るほどうれしいもので、その言葉から、自分の手にも人の痛みを和らげ癒す看護の力があることを実感した。それまで助産師としての自分になかなか自信が持てず、患者さんと関わることを怖いと感じることもあった自分にとって、あらためて助産師の持つ力を実感し、看護のすばらしさを感じる貴重な経験となった。

## 「看護の日」制定の趣旨

看護の心は、大人も子供も、病気や障害のある人もない人も、年齢・性別を問わずお互いを思いやる心です。この看護の心、ケアの心、助け合いの心について理解を深め育ていけるように、近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなみ、1990年に5月12日が「看護の日」として制定されました。



フローレンス・ナイチンゲール  
(1820年～1910年)

—MEMO—

2019年看護職員等からの体験談

発行 公益社団法人富山県看護協会・富山県ナースセンター  
〒930-0885 富山市鶴島字川原 1907-1  
TEL 076-433-5680 FAX 076-433-6428  
URL <http://www.toyama-kango.or.jp>